

紀要

■設立50周年記念号

- 鳥浜貝塚におけるニホンジカの利用…………… 佐藤 巧庸 (1)
- 土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論…………… 瀬口 眞司 (13)
- 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石…………… 宮村 誠二 (23)
- 横穴式石室の空間設計の検討
—志賀古墳群における平面プランと副葬土器…………… 堀 真人 (28)
- 木村石塚古墳出土埴輪について…………… 辻川 哲朗 (40)
- 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討
—石敷き遺構 第1遺構の構造について— …………… 田中 咲子 (57)
- 小型海獣葡萄鏡について…………… 福井 知樹 (61)
- 墨書土器にみる古代の近江 —その2—…………… 濱 修 (64)
- 比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク… 小林 裕季 (79)
- 『阿刀氏家譜系脈 御由緒二関ハル古記調査書類』
現代語訳・解題(2)…………… 阿刀 弘史 (90)
- 将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—…………… 三宅 弘 (98)
- 「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの…………… 中川 治美 (107)
- マメ類の利用についての研究ノート(2)…………… 小竹 志織 (119)
- 木製品の保存処理について —課題と実際—…………… 中村 智孝 (122)

34

湖北・湖東地域の前期古墳の葺石

宮 村 誠 二

1. はじめに

葺石は、埴輪と並ぶ代表的な古墳の外装施設である。その存在は古くから認識されており、すでに 100 年を超える研究史がある。近年、葺石をめぐるのは、埴丘の断ち割り調査の成果を用いた構造分析にもとづく施工技術系譜に関する研究が飛躍的な進展を見せており、その成立過程や変遷、地域性などが盛んに議論されている(1)。

こうした動向は、20 世紀末葉から 21 世紀初頭にかけて相次いで行われた奈良盆地東南部を中心とした地域の前期古墳の調査の進展に伴い、初期の葺石の姿が明らかになってきたことによるもので、すでに近畿中央部の事例を中心に葺石の様相が整理され、大方の変遷観が示されている(高橋 2002、青木 2003、廣瀬 2003・2008・2011)。

最近では、近畿中央部での動態が一応把握されたことをうけて、九州や中国、四国、東海、関東でも葺石の導入と展開が議論されている(高橋 1999・2002、山田 2004、塩治 2008、秋元 2013、石村 2019)。

しかし、その一方で、研究がほとんど行われていない地域もある。たとえば、近畿中央部と東日本とのあいだに位置する滋賀県の事例は、東日本への葺石の広がりを考える上でも重要な位置を占めるものと思われるが、今日までまとまった研究はみられない。

そこで本稿では、滋賀県の前期古墳の葺石をとりあげ、特徴と変遷を明らかにする。そして、当該地域での葺石の導入とその背景について考えてみたい。

とはいえ、滋賀県内には葺石を採用する前期古墳がさほど多くなく、また、類例のなかには 60 年以上も前に調査され、今日的な研究水準での検討が困難な事例も少なくない。それゆえ、本稿では比較的最近の調査事例が多い湖北・湖東地域の前期古墳の葺石を検討対象とする。

2. 葺石の様相

湖北・湖東地域において葺石の存在が確認されている前期古墳は 8 基である(図 1)。以下、発掘調査報告書等の記載事項にもとづき、各古墳の葺石の様相を概観する。

深谷古墳（前方後円墳・35.5m）

古墳は前方部を西に向けて築かれている。埴丘は 2 段築成である。葺石は後円部東側面、南側くびれ部、前方部西側面で検出されている。

前方部西側面の葺石は、埴裾で 25 cm 以内の小振りな石材が使用され、埴頂部近くでは 35 cm 程度の大振りな石材が用いられている。埴丘斜面の傾斜角度は約 20 度である。

南側くびれ部では、前方部でおおむね 20 cm 以内の石材

が用いられていたのに対し、後円部では、基底石に 25 cm 以上の石材を用い、その上方に 10～15 cm の石材が多用されていた。埴丘斜面の傾斜角度は約 20 度である。

なお、南側くびれ部では、地山の岩盤を整形して埴丘表面としているとみられる箇所がかなり認められた。

後円部東側面の葺石は、埴裾の基底石のみ残存しており、40 cm 前後の石材が用いられている。埴丘斜面の傾斜角度は 30 度前後である(高月町教委 2001)。

西野山古墳（前方後円墳・90m）

分布調査で、葺石とみられる人頭大の石材が確認されているが、詳細は不明である(高月町教委 2001)。

木戸越古墳（前方後円墳・37.2m）

古墳は前方部を北西に向けて築かれている。埴丘は 2 段築成である。葺石は前方部、くびれ部、後円部で確認されている。葺石材は円磨度の低い垂角礫や角礫が主体である。

前方部北西側面の葺石は、拳大～40 cm 程度の石材が横使いされている。埴丘斜面の傾斜角度は 30 度前後である。

東側くびれ部では、前方部の基底石とその上数段に 40 cm 前後を基本とする石材(小さいもので 20 cm 程度)を用い、上部にいくほど石材が小さくなる傾向が認められる。後円部の葺石もこれと同様の傾向にあるが、基底石の石材がやや大きく、45 cm 前後を基本とする。埴丘斜面の傾斜角度は前方部が 37～38 度、後円部が 35 度である。

後円部南側面の葺石は、1 段目斜面の基底石に 40～50 cm 前後の石材を横使いし、その上部に 20 cm 前後の石材が葺かれている。1 段目斜面の傾斜角度は 30 度前後である。2 段目斜面では、20～40 cm の石材が主体的に用いられている。2 段目斜面の傾斜角度は 30 度前後である(高月町教委 2001)。

姫塚古墳（前方後方墳・72～80m）

古墳は前方部を南に向けて築かれている。葺石は後方部東側面、後方部西側面、後方部南側面で検出されているが、前方部では確認されず、当初から施工されていなかったとみられる。葺石材は円磨度の低い垂角礫や角礫である。

後方部東側面では、葺石が高さ 1 m 前後まで残存していた。基底石に 15～25 cm のやや横長の石材を用い、基底部から 0.2～0.6 m の高さに 30～40 cm の石材が、さらにその上方には 15～20 cm の石材が用いられている。埴丘斜面の傾斜角度は約 45 度である。

後方部西側面の葺石は、基底部から約 1 m の高さまで残存していた。基底石は 20～40 cm の石材をおもに横使いするが、10 cm 前後の小振りな石を用いている部分もある。埴丘斜面の傾斜角度は約 45 度である。ここでは、基底部から

約 0.3mの高さまで急角度で積み上げ、そこから傾斜変換して約 45 度の傾斜で積まれている部分が認められる。

後方部南側面の葺石は、基底部から約 1.4mの高さまで残存していた。基底石に 20～25 cmの長方形の石材を横使いする。基底部に立ち上がりをもつ点は、後方部西側面で確認された状況と類似している。墳丘斜面の傾斜角度は約 45 度である（高月町教委 2005）。

若宮山古墳（前方後円墳・50m）

古墳は前方部を南西に向けて築かれている。墳丘測量時や分布調査の際に葺石が確認されている。具体的な様相は不明だが、用田政晴氏の観察によれば、後円部西側では地山に含まれる 5～10 cm大の小振りな石とは別にそれよりやや大きめの山石が多くみられるため、「少なくとも後円部の葺石の存在は確実である」（用田 2011、P. 36）という。

荒神山古墳（前方後円墳・124m）

古墳は前方部を北西に向けて築かれている。葺石は前方部、後円部とも確認されているが、前方部東側面に設定されたトレンチで良好な状態で検出された以外には残存状態は良好でなく、多くが崩落した状態であった。

このトレンチでは、3段築成の各段斜面で葺石が確認されている。1段目斜面では基底石に1辺 40 cmの比較的扁平な石材を用い、斜面に貼り付けるように設置されている。1段目テラスにいたる葺石は、上下端を小口積み、中位を貼石状に葺いている。1段目斜面の傾斜角度は 31 度である。2段目斜面の葺石は、基底石に1辺 40～50 cmの扁平な石材を用い、その上方には 20～30 cm程度の石材を小口積みで葺いている。2段目斜面の傾斜角度は 33 度である。3段目斜面の葺石は、基底石に長さ 40～50 cm、幅 20 cm前後の石材を横使いし、その上方 1 mあまりの範囲には長さ 20 cm程度の石材を小口積みし、さらに上方では貼石状に葺いている。3段目斜面の傾斜角度は 32 度を測る。

安土瓢箪山古墳（前方後円墳・136m）

葺石が確認されているが、具体的な様相は不明である（梅原 1938）。

雪野山古墳（前方後円墳・70m）

古墳は前方部を北東に向けて築かれている。葺石は前方部・後円部とも確認されているが、葺石の検出状況からみて、前方部東斜面には当初から葺石が施されていなかった可能性がある。

前方部の西斜面では、基底石に長軸 30～40 cmほどの石材が用いられている。

後円部では、東斜面に設定された後円部第 1 トレンチで検出された葺石が基底部付近に長軸約 30～50 cmの比較的大きな石材を用い、それより上では、20 cmほどの石材を部分的に用いながら、その間を拳大の石材で充填している。部分的に墳丘斜面に差し込むように葺かれた箇所もあり、表面にある葺石の内側には 1～2 石の裏込め石が存在した。

一方、これと隣接し、同じく東斜面に設定された後円部

第 2 トレンチの葺石は、石材を斜面に貼り付けるように葺かれている。使用石材も 10 cm角の小振りな石材を中心に、長軸 50 cmを測る大きな石材が所々に配されており不規則であるなど、葺石の葺き方や石材の大きさに違いが見られる。墳丘斜面の傾斜角度は約 30 度である。

後円部西斜面では、基底石に長軸が 50 cm近い石材を積み重ねるように用い、その上では長軸 20 cm程度の石材を挟みながら拳大の石材で充填している。墳丘斜面の傾斜角度は約 30 度である（雪野山調査団 1996）。

3. 湖北・湖東地域における葺石の特徴と変遷

ここでは、前章において概観した湖北・湖東地域の前期古墳の葺石の特徴を整理する。また、各古墳を福永伸哉氏による前期古墳の時期区分案（福永 1996）にもとづいて位置づけることで、当該地域での葺石の変遷を検討する。

(1) 特徴

湖北・湖東地域の葺石の特徴として、採用のあり方に地域間や古墳間・古墳群間で差異のあることを指摘できる。

すなわち、当該地域には、前章において概観した古墳以外にもやや古い事例だが、東近江市の神郷亀塚古墳（能登川町教委 2004）、そして、長浜市の長浜古墳群や米原市の定納古墳群（近江町教委 2005）に前期古墳が存在するが、これらには葺石が採用されていない。

また、葺石を採用する古墳には、前方後円墳が目立つが、墳丘規模に着目すると、湖東では墳丘長 70～136mの比較的大きな古墳に限られるのに対し、湖北では墳丘長 35m前後の中小規模の古墳にも葺石が採用されている。さらに、古保利古墳群中の前方後円墳では、湖東では確認できない古墳群中での継続的な採用が確認できる。

葺石自体については、全体として葺石材に円磨度の低い角礫や亜角礫が多用される傾向を指摘できるが、石材の大きさや用い方には古墳間で差異がみられる。

なお、当該地域では、先学によって初期の葺石として把握された重厚な裏込めをもつ事例（高橋 2002、青木 2003）や基底石に扁平な石材を用い、これを主に縦使いして墳丘裾に貼り付ける事例（廣瀬 2011）は確認できない。

(2) 変遷

次に葺石の変遷を検討する。福永氏による前期古墳の時期区分案は、仿製三角縁神獣鏡の登場を境に前期を 2 分し、さらにそれぞれを 2 細分するもので、前期を前Ⅰ期～前Ⅳ期の 4 期に区分する。氏は各期の実年代を、おおむね前Ⅰ期—3 世紀後葉、前Ⅱ期—4 世紀前葉、前Ⅲ期—4 世紀中葉、前Ⅳ期—4 世紀後葉と考えている（福永 1996）。

福永氏は雪野山古墳と安土瓢箪山古墳をそれぞれ前Ⅱ期と前Ⅲ期の代表例として挙げている。他の古墳については、上記 2 古墳のように埋葬施設や副葬品の様相が明らかでなく位置づけが難しいが、墳丘形態や出土埴輪の特徴などから、おおむね以下のように位置づけられるだろう。

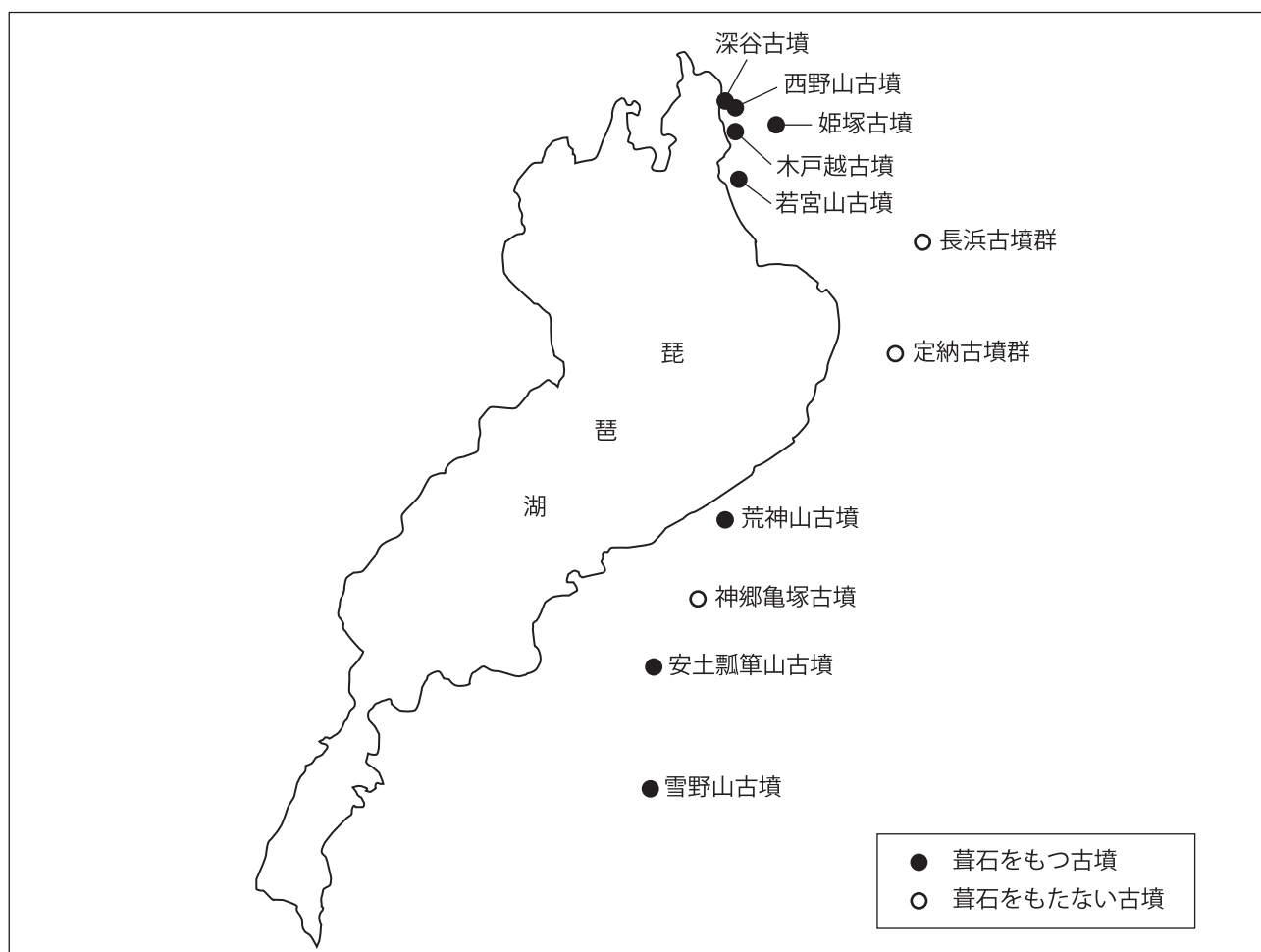


図1 湖北・湖東地域の前期古墳

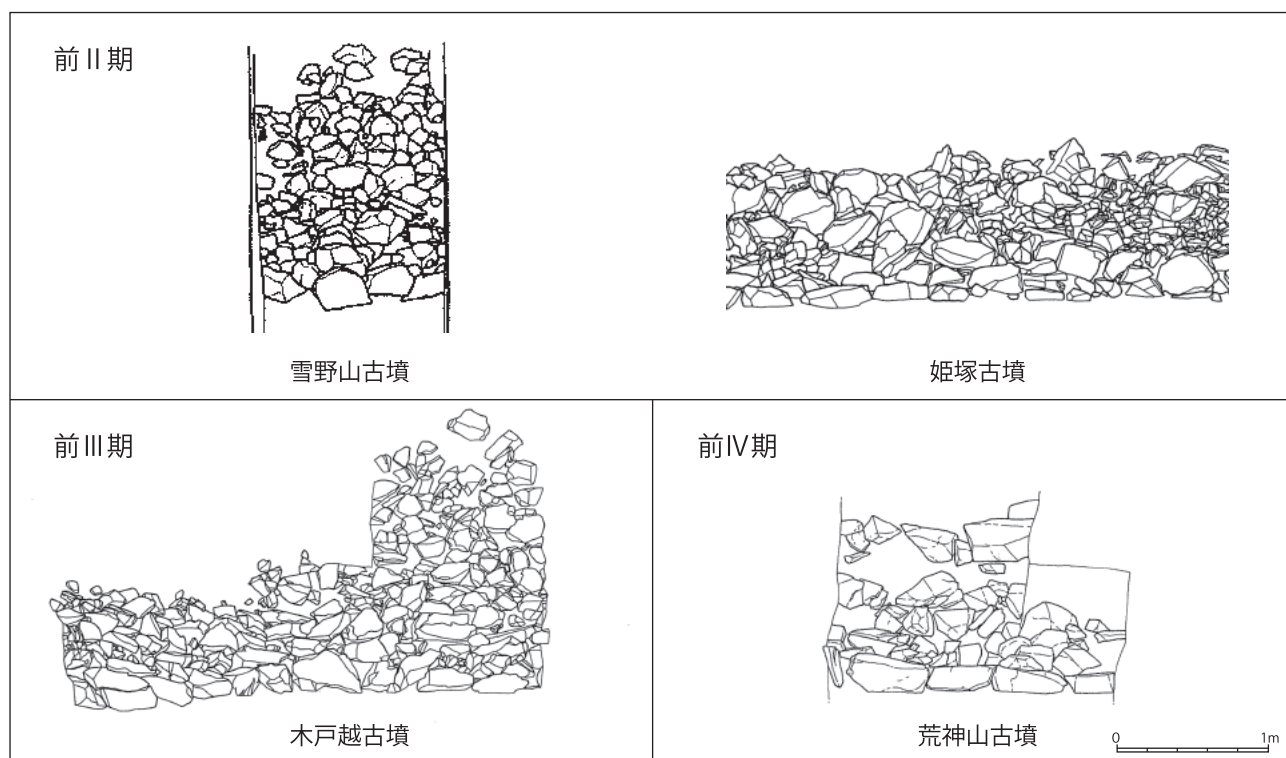


図2 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石の変遷 (S=1:40)

前Ⅱ期 雪野山古墳 深谷古墳 姫塚古墳
前Ⅲ期 安土瓢箪山古墳 木戸越古墳
前Ⅳ期 荒神山古墳 若宮山古墳 西野山古墳

それでは、以上の年代観に準拠して当該地域における葺石の変遷を検討しよう（図2）。

まず、前Ⅱ期に位置づけた3古墳の葺石は、のちの時期のものに比べ、全体として不統一な印象を受ける。これは墳丘各所で葺石の様相に差異がみられることに加え、基底石以外にも大振りな石材が不規則に使用されるなど基底石に他よりも大振りな石材を用いる傾向が弱いためであろう。さらに、葺石材として拳大～15 cm程度の小振りな石材が多用されることも特徴として挙げられる。

また、雪野山古墳と深谷古墳では、自然の岩盤に加工を施し、墳丘表面として利用している箇所がみられる点、雪野山古墳と姫塚古墳では墳丘の一部で葺石が施されていない箇所がみられる点を共通点として指摘できる。

こうした前Ⅱ期の葺石に対し、前Ⅲ期の葺石は、木戸越古墳にみられるように基底石に他よりも大振りな石材を用いる傾向が明確となり、葺石材は前Ⅱ期のものに比べてやや大型化する。木戸越古墳では、基底石に40～50 cmの石材が横使いされ、その上部には20 cm前後の石材が用いられていた(2)。こうした特徴は、前Ⅳ期にも引き続き認められ、荒神山古墳では、基底石に他よりも大振りな石材を横使いすることがより徹底されているようだ。

以上、湖北・湖東地域の前期古墳の葺石について採用古墳の年代観にもとづき、変遷を検討した。その結果、以下の特徴が明らかになった。

まず、当該地域では、福永氏による古墳編年の前Ⅱ期、すなわち4世紀前葉に地域内でも最初期の方後円墳においていち早く葺石が導入され、間もなく前方後方墳にも葺石が導入されたとみられる。そして、その後も前期をとおりて前方後円墳を中心に葺石が採用され、基底石に他よりも大振りな石材を横使いすることが徹底されていく方向で推移したものと考えられる。

4. 葺石の導入とその背景をめぐる予察

それでは、最後に湖北・湖東地域の前期古墳の葺石を廣瀬氏の研究成果に拠って大局的見地から検討し、当該地域での葺石の導入とその背景について予察する。

廣瀬氏は、先行研究において前期古墳の葺石を以下のよう分類している（廣瀬2008・2011）。

- A類 重厚な裏込めを用いながら裾部を急角度で立ち上げたのち、一定の高さで傾斜を緩和させて上方斜面に至るもの。表面には裏込めよりも大振りの石材を主に横使いして積み上げる。
- A1類 裾部を石垣状に一定の高さまで立ち上げ、傾斜変換して上部に至る。表面に積み上げる石材は基底石とそれ以外で明確な区別がない。

A2類 裾部を2、3石程度急角度で立ち上げ、傾斜変換して上方に至る。基底石には他よりも大型の石材が用いられる。

B類 基底石に扁平な石材を用い、これを主に縦使いして墳丘裾に貼り付けるもの。顕著な裏込めを用いずに全体を積み上げる。

B1類 扁平な石材を貼り付けて基底石とし、一定の高さまで急角度で石材を積み上げたのち、傾斜変換して上方斜面に至るもの。

B2類 扁平な石材を貼り付けて基底石とするが、明確な立ち上がりをもたず、裾部から一定の角度で石材を積み上げるもの。

C類 他より大振りの石材を横使いして基底石とし、顕著な裏込めを用いずに裾部から一定の角度で上方まで石材を積み上げるもの。

湖北・湖東地域の前期古墳の葺石を廣瀬氏の分類案に照らすと、具体的な様相が判明している事例のうち、木戸越古墳と荒神山古墳の葺石はC類に該当すると思われる。

また、廣瀬氏がA1類→A2類→C類と系列的に変遷したことを指摘していることを念頭におくと、姫塚古墳で確認された基底部の立ち上がりや雪野山古墳で確認された1～2石の裏込め石は、A2類からC類への過渡的様相として理解できる。

採用古墳の年代や分布からみて、A類は奈良盆地東南部で成立した可能性が高く、大阪府の玉手山古墳群や京都府の椿井大塚山古墳、寺戸大塚古墳などでも採用されている。雪野山古墳や深谷古墳、姫塚古墳の事例は、これらA類の葺石とも関係が深いとみられる。先行する時期のA類採用古墳のあり方からみて、湖北・湖東地域における導入期の葺石の系譜は、奈良盆地東南部をはじめとする近畿中央部に迫れる可能性が高いだろう。

こうした湖北・湖東地域での葺石の導入背景を考える上で注目されるのが、導入期の葺石をもつ雪野山古墳や古保利古墳群が奈良盆地東南部の勢力が主導する政権による東海勢力牽制政策の一端を担って存在しているとする福永氏の見解である（福永1996）。当該地域の前期古墳における葺石の導入は、こうした倭王権の東方政策にかかわる王権中枢勢力と地域勢力との強い結びつきを背景に達成された可能性が考えられる(3)。少なくとも導入期においては葺石に王権中枢勢力との親疎が反映されていたとみられる。

なお、滋賀県の東に隣接する東海地方では、岐阜県象鼻山1号墳（養老町教委・富山大考古研1999）や愛知県東之宮古墳（犬山市教委2014）といった前方後方墳にいち早く葺石が導入される(4)。さらに、その後においても前期後半の大型前方後円墳である愛知県青塚古墳（犬山市教委2001）や前方後方墳の岐阜県西寺山古墳（可児市教委1999）に重厚な裏込めをもつ葺石が採用されるなど、湖北・湖東地域とは異なる動態がみられる。こうした違いが何に起因する

のか、東海地方での葺石の導入事情も含め、その解明には、より広域的な比較研究の必要性を痛感する。

残された課題は多いが、本稿がこれまであまり検討されてこなかった滋賀県の古墳の葺石を考えるための一助となれば幸いである。

註

- (1)たとえば、葺石の起源は、従来、漠然と中・四国地方の弥生墳丘墓に求められてきたが(近藤 1986)、それを批判し、東四国地域の積石塚に求める意見(高橋 1999・2002)に加え、近年は列島外、具体的には中国東北地方から朝鮮半島北西部に求める意見(廣瀬 2008・2011)も主張されるなど、これまで以上にグローバルな視点に立った議論が要求される情勢にある。
- (2)なお、深谷古墳・姫塚古墳・木戸越古墳の葺石については、黒坂秀樹氏の言及がある(黒坂 2005)。黒坂氏は、深谷古墳を3世紀後葉、木戸越古墳を4世紀前葉の築造とし、深谷古墳の葺石と姫塚古墳の葺石が細部に違いはあれ、葺き方が類似すると観ている。そのうえで「精美さというか完成度は木戸越古墳が高く、次いで姫塚古墳と観ている」(黒坂 2005、P. 72)。黒坂氏は姫塚古墳の築造を4世紀前半のなかでとらえているが、この言及からは、氏の深谷古墳→姫塚古墳→木戸越古墳という変遷観が窺える。
- (3)なお、雪野山古墳については、都出比呂志氏が堅穴式石室や木棺型式が奈良県天理市の天神山古墳のそれと類似することを指摘し、こうした類似が奈良盆地東南部と近江とのこの時期における交流関係を示唆するものとして重要であることを指摘している(都出 1996)。
- (4)ただし、象鼻山1号墳の葺石は、施工後に表面が盛土によって被覆される特異なものである。

挿図典拠

- 図1 宮村作成
図2 各古墳の発掘調査報告書掲載図を加工して宮村作成

引用・参考文献

- 青木 敬(2003)「葺石構築法とその変化」『古墳築造の研究―墳丘からみた古墳の地域性―』 六一書房
秋元陽光(2013)「東国における葺石の受容」『駒澤考古』第38号 駒澤大学考古学研究室
石村友規(2019)「九州島における導入期の葺石に関する一考察」『学術財研究』第1集 『学術財研究』編集事務局
黒坂秀樹(2005)「総括」『高月の主要古墳Ⅰ』高月町教育委員会
近藤義郎(1986)「前方後円墳の誕生」『岩波講座日本考古学6 変化と画期』岩波書店
塩治琢磨(2008)「葺石から見た古墳の一樣相」『真朱』第8号
高橋克壽(1999)「西寺山古墳の葺石」『前波の三ツ塚』可児市教育委員会
高橋克壽(2002)「古墳の葺石」『文化財論叢Ⅲ 奈良文化財研究

- 所創立50周年記念論文集 奈良文化財研究所学報第65冊』奈良文化財研究所
都出比呂志(1996)「雪野山古墳の石室の特徴と構築過程の復元」『雪野山古墳の研究』 雪野山古墳発掘調査団
広瀬和雄(1992)「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社
廣瀬 覚(2003)「葺石」『立命館大学文学部学芸員過程研究報告 第10冊 五塚原古墳第1・2次発掘調査概報』立命館大学文学部学芸員過程 真陽社
廣瀬 覚(2008)「葺石の成立・展開と地域間交流」『吾々の考古学』 和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
廣瀬 覚(2011)「葺石と段築成」『古墳時代の考古学3 墳墓構造と葬送祭祀』 同成社
福永伸哉(1996)「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』 雪野山古墳発掘調査団
山田俊輔(2004)「前期古墳の葺石」『川東車塚古墳の研究』 吉備人出版
用田政晴(2011)「前期小形前方後円墳の史的位置」『琵琶湖と地域文化―林博通先生退任記念論集―』 サンライズ出版

古墳文献

- 犬山市教育委員会(2001)『史跡青塚古墳発掘調査報告書』
犬山市教育委員会(2014)『史跡東之宮古墳』
梅原末治(1938)「安土瓢箪山古墳」『滋賀県史跡調査報告』第7冊 滋賀県
近江町教育委員会(2005)『定納古墳群』
可児市教育委員会(1999)『前波の三ツ塚』
高月町教育委員会(2001)『古保利古墳群 第1次確認調査報告書』
高月町教育委員会(2005)『高月の主要古墳Ⅰ』
能登川町教育委員会(2004)『神郷亀塚古墳』
彦根市教育委員会(2010)『荒神山古墳』
雪野山古墳発掘調査団(1996)『雪野山古墳の研究』
養老町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室(1999)『象鼻山1号古墳―第3次発掘調査の成果―』

(みやむら せいじ：調査課 主任技師)

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.34 2021.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages